

幼稚園教育の重要性



幼稚園とは何か

幼稚園は、子どもの学校経験のたいせつな第一歩である。幼稚園での第一日をはじめの前には、子どもは主として家族集団の中で生活しており、近隣やより広い社会には、ほんのわずかしか出ていったことはない。子どもはそれ以前には、ほとんど社会生活の経験を持っていない。いまや、彼は突如として、多くの新しい適応場面に直面する。彼は毎日きまった時間に、新しい興奮的な

ヘレン・ヘファナン

ヘレン・ヘファナンは、カリフォルニア州教育省、初等教育局長、「子供の教育」編集主任。

これは一九五九年秋、コネティカット州の教師たちに対してなされた講演である。国際幼年教育協会および多くの州は、子どもたちの最初の学校経験として、幼稚園のみならずナースリー・スクールの開設のために努力している。

経験に向かって出かけていく。そこでは彼の役割は変化した。ここでは彼は、自分自身を、仲間集団に参加する一員として受けなければならない。自分が快く安全な生活をするためには、彼は少なくとも一人か二人の友人と満足な関係を樹立しなければならない。彼は新しいおとな、すなわち教師に適應せねばならない。教師のやり方は、親のやり方とはかなり違ったものであるかもしれない。

子どもは、以前に知っていたよりもっと広い空間、もっと親

密さを欠いた環境の中に身をおいている。多くの新しい魅力的な物を、自分の専用に与えられているのではなく、他人と分け合わねばならない。多くの珍しい、恐怖をよびおこすような物を、使用法の通りに調べてみて、それをどれだけ自分で扱うことができるかをみるために、いろいろと試みてみなければならぬ。子どもがこのすべての適応を、どのくらい幸福感と自信をもってすることができるかということは、多くの要因によっている。

子どもが新しい場面にどのように適応するかということは、たとえば、社会的成熟度に依存している。彼の行動からみて、子どもがどの程度、他人と仲よくすることを学んだかということを知ることが教師は知るのである。彼は見知らぬ場面に身をおくことになれているか、あるいは、そこから逃れて、何か安全を示すシンボルにしがみつくであろうか。彼は直ちに自分から行動をはじめらうか、あるいは他の子どもがやることを見ているだろうか。彼がその場に近づくのは、友だちのせいだろうか、あるいは材料のせいであろうか。

幼稚園の教師はこういう——あるいはもっとたくさん——質問に対して、それぞれの子どもについて答えられねばならない。子どもはそれぞれ独自のパーソナリティーをもっている。教育を効果的にするためには、幼稚園の教師は、ひとりひとりの子ども

についてよく知らねばならない。教育は家庭と学校の協同事業であるから、その家庭的背景、父親、母親などについて知らねばならない。教師がひとりひとりの子どものことをよく知るほど、教師は子どものためによく尽くすことができる。教師が子どものことをよく知るほど、子どもが現在発達しているところに立って、これから先の進歩に合理的な期待をもつことができる。

幼稚園の年齢の子どものグループは、どのくらいの大きさであるならば、一人の資格のある教師が個々の子どもの要求を知ることができ、彼らに適切な学習経験を与えることができるものだろうか。おそらく、特定の数を示すことはできないだろう。その数は物理的環境にもよるし、親の参加の程度や教師の質にもよるであろう。われわれの経験からは、一日三〜四時間の教育で、二〇人〜二五人以上でないことが望ましいといえる。そのくらいならば、しばしば親と会合する時間をもつこともできるし、子どもの学習経験に適切に備えることもできる。

アメリカは幼児たちにこのような教育のプログラムを与えることができるだろうか。全世界の人口の七パーセントを有し、全世界の四〇パーセントから五〇パーセントの富を持っているアメリカならば、その欲する教育を子どもたちに与えてやれるはずである。しかるに、われわれが教育に対して費やしている費用は、

國の全予算の四パーセントにもみたくない。ロシアはその二倍も費やしている。ノールウェーのような小国が、全予算の一三パーセント以上を教育に費やしている。われわれが教育をいかに評価しているか、また、この人生の最初の時期が将来のパーソナリティ、知的能力および情緒的適応にいかん重要な意味をもつかということについて、どれだけその重要性を認識しているのか、疑問をもたざるを得ないのである。

幼稚園の教師はいかに重要であるか

子どもが幼稚園に適応するための主要な要因は、疑いもなく教師である。すべての親がその子どもを託したいと思う教師は、子どもを理解して愛する人であり、健全なプログラムを遂行するのに必要な専門教育を受けた人である。教師は子どもが社会の一員となるのを助ける重大な責任を、もっているのであるから、われわれの文化をよく知り、それを真に理解した広い教養のある人でなければならない。鋭い感覚をもった教師は、現代の科学技術の進歩は、子どもが住んでいる世界をも、驚くほど加速的ないきおいで変化させつつあることを知っている。故に、教師は子どもが科学の世界を理解し、そして変化を当然のものとして期待し受け入れるのを助けるのに重大な責任を負っている。

教師は、人生を子どもにとって豊かなものにするためのすべての興味は、早くより養われなければならないことを知っている。そこで教師は芸術や文学、音楽や身体リズムに興味をもって、教師は、子どもたちとも同様の興味に、導く方法を学んでいる。

教師は幼稚園の環境の重要性や、設備、材料が子どもの発達にとっていかにたいせつかということを知っている。

教師はまた、その専門職としての準備の期間が終わっても、幼稚園教師としての教育には終りが無いことを知っている。それは医者でも、技術者でも同様であり、人間の発達などの段階であろうともそこに献身した教師は、その現場において教育されつづけているのである。そしてその最前線にある人々の研究と経験とは、われわれの子どもに関する知識および、その適切な発達を促す方法に関する知識を、日々加えているのである。

それ故に、良い幼稚園教師は、自分自身が常に学習しつづけることができるような専門職を望んでいる。このような学習は、大学における計画された公式の研究の機会によって、あるいはまた、同じ専門の仲間のグループや親との非公式な研究の機会によってなされるであろう。しかし、何よりも、教師の専門家としての成長は、生活を共にしている子どもたちを観察することにより

洞察を増していくことによって行なわれる。専門職として、幼稚園の教師の仕事ほど困難な教職はないし、また幼稚園の教師の仕事ほど、国家と全世界の将来にとって、社会的に意義のある仕事はないであろう。

教師の個人的な生活の面からいうと、幼稚園の年齢の子どもと共に生活することは、労力のいる仕事であり、元気にあふれた健康とは、ちぎれるほどのエネルギー、軽快な精神および戸外を樂しむ心を必要とする。

一日に三時間か四時間、一週は五日間、一年で一八〇日以上の日を幼稚園の子どもとともに生活するためには、幼稚園の教師は、四歳から六歳の子どもたちに心から愛情を抱いていなければならない。教師は子どもたちを理解しようと努力することを樂しむことができればならない。子どもとともに仕事をするを好むものでなければならぬ。

もしも身体をもじもじ動かしたり、足をぶらぶらさせたり、どこでもおかまいなしにあくびをしたり、ひっかいたりするような子どもの行為に耐えられなく感じたり、あるいは、教育の対象である人間よりも教科の方により多くの興味を感じるようであるならば、その教師は人生の進路を誤ったのである。その人はもっと彼女にふさわしい職業を求めべきである。しかし、もしも教師

が、ひとりひとりの子どもをすばらしい魅力的な存在としてみることができるならば、また、子どもがその可能性を実現し、周囲の物理的、社会的な世界の中に自分自身の位置を見出すのを助けることに一役買いたいと願うならば、その教師は子どもの成長と発達をみることによって個人的な満足をむくいられるであろう。

幼稚園の教師については、いくらでもいうことができよう。彼女はハリウッドの映画俳優のように美人でなくとも、四歳と五歳の子どもの目には、世界中でもっとも美しい婦人として映るであろう。彼らは教師のしぐさをまねし、彼女のことがばつかいや声の質を自分のものとし、彼女の理想を受け入れ、彼女が尊敬するところを愛するようになる。人として生まれて、これ以上に人生を賭けるにふさわしい仕事があろうか。

しかし、子どもとの関係においては、温かく、前進的で受容的な教師が、いまや、立ち上がって、幼児教育を擁護せねばならない時がきた。現代の世界の不安定と不安感とは、子どもが生理的にも心理的にもレディネスのできていない、そして子ども自身もなんなら必要を感じていないカリキュラムを押しつけようとする試みとなって表現されている。われわれは、IQ一〇〇の完全に「正常な」子どもは、六歳六か月になるまで、読むことを学ぶことはできないということを証明する多くの証拠をもっている。子ども

を駆り立てようとする試みは、たしかに読むことを早めることにいくらか成功するであろう。しかし、それによって生理的にも、心理的にも、過度の負担をかけ、読むことに對する興味を失わせるかもしれないという危険を犯している。時が熟すれば、子どもはたやすくそれに習熟することができるのである。

どのような学習経験を幼稚園は与えなければならぬか

それでは、幼稚園はどのような学習経験を与えねばならないかという質問が当然起こってくる。いまではよく知られている四歳児、五歳児の特質に照らしてみても、どのようなカリキュラムが適当であるのか。この質問に對して、あらゆる部門の十分な資格を備えた専門家が注目してきた。

だれも周囲の世界に適切に對処できるような能力を生まれながらに持っているわけではない。現代の世界は、子どもが人生にうまく適応するのに必要な能力を、成長の過程で自然に学習することを期待するのには、あまりに複雑な世界である。人間としての資質や、その属する社会集団に貢献する能力は、子どもの経験と、教師の用意する学習の機会によって作られる。教育においては、量も質ともに重要である。幼児期の最初の社会的、知的、情緒

的経験は重要な意味がある。この時期に子どもは、将来も当面するであろう多くの人生の場面に遭遇し、あるやり方でそれを解決する。たとえば、子どもは家族とうまく生活することを学ばねばならないし、後には、家族圏を越えて他の人々と生活することを学ばねばならない。子どもは生存するために、基本的な健康と、安全な行動を学ばねばならない。彼は次第に強くなる要求をみだすに十分な言語のコミュニケーションの技能を獲得せねばならない。彼は移動能力が増大して、物理的社会的環境と直接に接触する範囲がひろがるにつれて疑問に思うことに解答を見出さねばならない。

幼児のためのカリキュラムは人生そのものと同様に幅のひろいものである。主目的は、子どもが人生に最善の適応をすることを助けること。すなわち、その子どもの人間としての可能性を十分に伸ばすことである。学習に役立つ場面で、子どもはその経験を広げ、また、その経験の中で子どもは自分自身を見出すよう励まされる。子どもは与えられた具体的な材料を使用することを励まされ、その感覚的印象を直して理解を深めていく。幼稚園は幼児が自分自身であって安全な環境を与える。また、友人とともに生活することを学び、幼児の性質や要求を理解する専門家によって計画され、整えられた環境を十分に自分のものとすることを学

べるような環境を与える。

教師は、自分の教育はこれよいかを確かめるために、子どもの行動が変化したかどうか、次のような点について自問してみるのがよい。

彼らはより健康になったか。

他の子どもやおとなとの関係はよくなったか。

コミュニケーションの技能をより多く学んだか。

子どもはより独立的な行動がとれるようになったか。

自分自身の身のまわりのことや、自分の行動について、より多く責任をもつことができるようになったか。

物の世界についてよりよく理解するようになったか。

科学の世界についてよりよく理解するようになったか。

よい幼稚園のプログラムは、すべての子どもに次の一〇の重要なことを考えねばならない。

…… 健康を維持し発達させること

…… 身体の発達を促進させること

…… 社会生活についての理解をひろげること

…… 科学の世界にはいること

…… 空間的、量的関係の理解をすすめること

…… 言語の使用力を広げること

…… 文学的遺産を知り、楽しむこと

…… 芸術的媒体を通して、自分自身を美的に表現すること

…… 音楽的遺産に親しみ、それを楽しむことを学ぶこと

…… おとなや子どもと満足した関係をつくること

幼稚園が、それぞれの子どもに可能な範囲において、十分にこれらの目標を達成するならば、一部の明瞭を欠いた、しかし大声でわめきたてる人びとが要求するように、幼稚園のプログラムを「もっと高度にする」ために時間を費やす必要はないのである。

幼児の仕事に専念する人びとは、実際の幼児をよく知らない皮相的な批判に動かされて、誤った行動に走ることにないようにしなければならない。

真の問題は何か

幼稚園教育をもっと向上させることができる。建設的な変化を望む専門家や一般の人びとは、明瞭な考えをもってしている。われわれはいままでのような変化が必要であるかを知っている。また、われわれは、幼児教育の真の問題は何であるかを知っている。

第一に、すべての町で、われわれは幼稚園教育のための物的設

備をよく検討せねばならない。

幼稚園教育の向上に関心をもつ人はだれでも、施設設備の問題と正面からとりくまねばならない。ある批判者がいうように、教師は五歳児から七歳児をつくり出すことはできない。

しかし、われわれは学習の条件を改善することはできる。それによって、すべての子どもは、成熟段階に応じて、適切な発達をすることができるといえる。

第二に、われわれは、幼稚園における健康のための方策をよく検討せねばならない。

入園の前に医学的既往歴や検査の資料をそろえてあるか。予防接種はしてあるか。毎日の健康管理はよいか。風邪や病気の徴候を示す子どもを隔離する施設があるか。換気、保温、日当りなどの条件は、健康の促進に役立つものであるか。栄養のためのプログラムは計画されているか。設備は安全の観点からいって最善の状態であるか。身長体重の測定は毎月定期的に行なわれているか。ここにあげたのはみな、われわれが尋ねてみて答えねばならぬ問題である。われわれは、このような問題のすべてに対して、何かをすることができるといえる。しかし、批判者たちは、われわれが直ちにすることができるような地についた質問については、ほとんど興味を示さない。

第三に、われわれの幼稚園で備えている遊具や材料のことを検討せねばならない。

われわれは運動技能を促進させるために活動的な遊具を備えているか。——ジャングルジム、ぶらんこ、箱、平均台、樽、車、三輪車、手押車など。

われわれは、手で操作したり、構成したりするのに適当な材料を備えているか。——つみき、砂箱、粘土、木工道具、パズルなど。

われわれはごっこ遊びを刺激するのに適当な材料を備えているか。——家具や玩具、電話、自動車や電車の玩具、絵の具と画架、楽器、絵本、科学的経験のための材料。

われわれはこういうものについて、いろいろと考えを出すことができる。われわれはそれを買うこともできる。両親はそれを作るのに手伝ってくれる。しかし、幼稚園で子どもたちのためにもっと教育してほしいと望んでいるようなところで、環境や材料は案外見過ごされている。

第四に、幼稚園は教師次第でどうにでもなる。われわれは職員のことを検討せねばならない。

明らかに、よい幼稚園教師は、熟練した専門家である。彼女は子どもの立場に立って、子どもを理解する。彼女は、いろいろの

教育的可能性をもった環境を作れるように、多方面にわたって知ってなければならぬ。彼女は学習のための良い状況を作らねばならない。彼女は個人差を認知し、個人の要求に応じることができる。彼女は、子どもの学習に必然的に伴う緊張をできるだけ小さくすむようにすることができる。彼女は子どもを危険から守る。彼女は、毎日くりかえされる日課であり時間をとりすぎないように、うまく運営することができる。

われわれは、このようなことをすべて幼稚園の教師に期待することはできるであろうか。それはできると答えたい。しかしそれには条件がある。われわれは、一クラス二十五人という方針をうけいれて、実行せねばならない。われわれは、幼稚園の教師となるための教育のレベルと年限を、小中学校の教師と同等にまで高めなければならない。われわれは、最高の質の教師を確保するために、彼らが魅力を感じるような十分な給料を支払えるようにする必要がある。そして、「小さな子どもなど、だれでも教えることができる」という迷信をぬぐい去らなければならない。幼児を教えるために要求される資質は、どの段階の教育にも必要とされる資質と同じ程度に高度のものなのである。

第五に、われわれは家庭と幼稚園との協力を向上させる必要がある。

すなわち、入園前に親と面接すること、親の参観、非公式な家庭訪問、一年に二回は親と個人面接をすること、親と教師の会合、親のための回覧図書制度など。

第六に、われわれは常にカリキュラムに関心をもたねばならない。

幼稚園の教師は「子守り」ではない。彼女は、(1) 物理的、自然的環境についての学習をすすめる、(2) 人間とその活動についての学習をすすめる、(3) 健康と自立の習慣をすすめる、(4) 絵画製作や音楽、文学などの芸術的経験や創造的活動をすすめることにも有能な教育者である。

専門家は現在の知識の上にかたく立ち、仮説を検証するためのパイロット・スタディにもとづいて新しい方向に研究をすすめていくのである。多くの批判者たちは、現代の世界の科学の業績に拍手を送る。しかし、教育内容や教育方法の変革を提唱するに当たって、科学者が払うのと同様の注意深い検証の時期が必要であることに気がついていない。健全な幼稚園のプログラムについて、現在確立している原理に立って、改善をすすめていくならば、十一年先には、幼児教育はさらに大きな進歩を遂げるであろう。

(お茶の水女子大学・津守 真訳)